

今週の顔

「本物を観る目」

横田 真紀

ゼミ内でもあまり知られていないかと思いますが、実は私、帰国子女であります。
(日本語しかまともに喋れませんが・・・)

なぜ唐突にこんなことを書き出したかといいますと、本日(平成11年11月29日)私が滞在していたロシアが後援している「新星日本交響楽団 イリア・マシュケヴィチ コンサート ~三船優子を迎えて~」というクラシックコンサートに行き、モスクワに住んでいた時のことを少し思い出したからです。

モスクワに住んでいた頃、私は親に連れられバレエやサーカスを観にいきました。又4年に1度行われる音楽のオリンピックとも言えるチャイコフスキー コンクールを観に行く機会にも恵まれました。小さい頃からピアノを習い、モスクワではフルートを習っていた私にとってクラシック音楽に触れる機会は比較的多かったと思いますが、やはり現地の人達は小さい頃からバレエやクラシックコンサートに行く機会が私たち日本人に比べ圧倒的に多いからなのではないでしょうか、とても耳が肥えています。チャイコフスキー コンクールではレベルの高い人々が同じ楽器を奏するので、私からすればみんな素晴らしく聞こえ、誰が一番上手かなどあまりわからないのですが、他の観客は素晴らしい人には大きな拍手、「ハラショー(素晴らしい)」の嵐を送り、劣る人にはまばらな拍手しか送りません。普段のコンサートやバレエではアンコールの際には必ずスタンディングオベーションでブラボー、ハラショーの声を送ります。

しかし今日のコンサートでは、楽曲が終わり、指揮者がアンコールに応える際にもみんな席に座ったまま拍手をするだけでした。

これは日本人が普段からあまりクラシックコンサートやバレエを観にいかないことと、少し失礼かもしれませんが、私も含め、まだ多くの人の耳が肥えていないことによるものだと思います。ヨーロッパのアンコールと日本のアンコールは全く別物なのです。ヨーロッパでは良いものには大声をあげて絶賛し価値のないものはそれなりの評価しか出しません。日本では終われば拍手が当然のもののように起こります。これでは演じている側は自分の評価がいかなるものかわからないでしょう。

これは、クラシックがヨーロッパで作られ発展してきたもので、日本人の現在の環境では仕方ないことなのかもしれません。日本には日本の歌舞伎や能などの伝統の芸術があります。しかし、ロシアをはじめドイツやオーストリアでのクラシックは庶民のものとなって生活に密着していますが、日本では歌舞伎や能は一部の人間のものです、生活に密着しているとはいいいがたいものです。

このように、日本では芸術的な面では音楽、絵画などまだまだ本物を観る目がヨー

ロッパに比べて未発達だと思います。教育でも小さい頃から正装してオペラ・バレエ・絵画などを時々観に行くヨーロッパと、勉強ばかり詰め込み塾に通わせる日本とでは、感受性・創造性に大きな差ができてしまうことでしょう。芸術に親しむという基盤が日本にはまだまだできていないようです。

今のような現代社会では、芸術に親しむことによって心に豊かさを育み、充実したゆとりのある生活を楽しむ生き方を求めることも大事なことはないでしょうか。

私は、今日このコンサートで日常の勉強やゼミ活動、サークル活動、友達関係から離れ、非日常的な空間で、本物の楽器の音に圧倒され、素晴らしい技術、感受性を目の当たりにし本当に感動しました。最初は理解できなくても、音楽・絵画・ダンス、なんでもいいです、本物の芸術を観て、本物を観る目を少しずつ豊かにし、精神も豊かにしていきたいものです。

注・この文の中で日本人はまだまだ芸術を観ることにに関して未発達だという事を書きましたが、実際に私がモスクワにいた頃のチャイコフスキー コンクール、バイオリン部門で1位を獲得したのは実は日本人の諏訪内晶子さんという方でした。日本人にも素晴らしい芸術家は大勢いらっしゃることを最後につけくわえておきたいと思います。